

2-34-2 南宗寺

南宗寺は、臨濟宗大徳寺派の禪寺で、戦国時代、堺を支配した武将、三好長慶が父元長の霊を弔うため弘治3年（1557）に大林宗套を迎え、今日の宿院あたりに寺を開いた。その後大坂夏の陣（1615）にて他の寺院とともに焼失したが、当時の住職澤庵によって現在地に再建された。境内には茶道を完成させた千利休や師武野紹鷗たけのじょうおうの供養塔などがある。また国名勝の枯山水かれさんすいの庭、八方睨にらみの龍の描かれた仏殿、山門・唐門は国の重要文化財に指定されている。

千利休と茶道

南宗寺には、利休一門とその師武野紹鷗の供養塔がある。利休の「茶禅一味」の精神基盤は大林宗套ら歴代の和尚のもとで禅の修行をし、確立されたと言われている。

境内の奥には、利休好みの茶室「実相庵じっそうあん」があり、師紹鷗遺愛の「六地藏石燈籠」、利休遺愛の「向泉寺伝来袈裟形手水鉢けさ がたちょうずばち」がある。

説明板より